

シンポジウム「歴史のなかの地図Ⅴ 江戸と江戸城」

シンポジウム「歴史のなかの地図Ⅴ 江戸と江戸城」

科学研究費補助金基盤研究（A）「地図史料学の構築―前近代地図データ集積・公開のために―」、同「地図史料学の構築」の新展開―科学的調査・復元研究・データベース―では、二〇〇六年以来毎年、東京大学史料編纂所画像史料解析センターと共催し、「シンポジウム 歴史のなかの地図・空間」シリーズを開催してきた。二〇〇九年度には「歴史のなかの地図Ⅳ 政治と文化 第二部 政治と空間―江戸城」と題し、政治史（深井雅海氏「江戸城という政治空間―日常的な政治運営と本丸御殿」・建築史（西和氏夫「江戸城と江戸城図―図面で御殿はつくられたか」）からの講演を行った。

二〇一〇年度「歴史のなかの地図Ⅴ 江戸と江戸城」では、これらの成果を踏まえ、江戸城と江戸の両者を有機的に論じることをめざした。日本史から松尾美恵子氏・岩淵令治氏・千葉正樹氏の報告、中国史についての杉山清彦氏報告、朝鮮史の吉田光男氏のコメントにより、東アジアを視野にいった議論を行なった。以下、当日の報告に基づき、各報告者がそれぞれまとめたものを、シンポジウムの成果として収録する。

研究代表・杉本史子

都市空間のなかの江戸城

杉 本 史 子

江戸幕府政治の中心である江戸城本丸の構造と政治については、深井雅海『江戸城―本丸御殿と幕府政治』⁽¹⁾をはじめとする成果を生んできた。

また殿中での儀礼研究も進展している。一方、都市としての江戸の研究も、大きく進展してきた。しかし、両者はそれぞれの分野で論じられており、両者を統合した議論とはなっていない⁽²⁾。

本稿では、両者を有機的に論じるための、江戸城（狭義・広義）がどのような空間構造を持っていたのかについての概念を提示し、それに基づきシンポジウム開催趣旨について説明する。

一 城と都市

織豊期、それまで分立していた城館・家臣団集住地と町場が結びつき、江戸をはじめとする近世城下町へと発展した。冒頭で述べたように、近世都市としての江戸については、諸社会集団の実態、その重層・複合と都市社会の分節構造、およびそれに対抗的な社会構造の展開⁽³⁾について、都市空間の実態の解明とともに、近年飛躍的な研究の展開がみられた。しかし、都市のなかの江戸城については、都市史の視点からは、「閉ざされた核」であったが故に「城下町の都市生活の機能的核とはなりえない

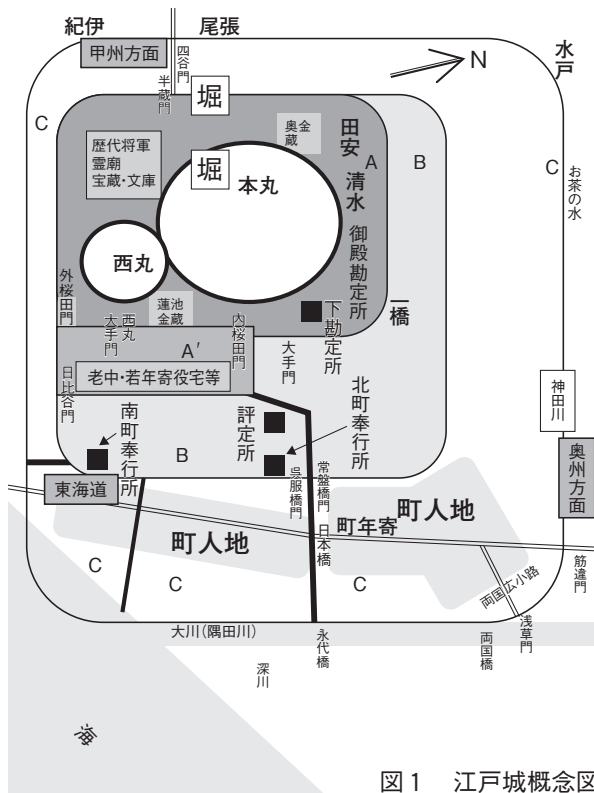


図1 江戸城概念図

「政事」を行っていたのか。右の都市史研究の成果を得て、都市の実態を踏まえたうえで、都市に基盤を置く政権中枢の検討が可能な段階に至っている。次に掲げる図1「江戸城概念図」は、天守閣を捨て軍事的功能最優先から「実務的政庁」⁽⁶⁾としての性格を強めた段階、明暦の大火（十七世紀後半）を経て評定所が独立した場となり、門の守衛体制も整った享保期（十八世紀前半）後の江戸城に注目して作成したものである。あえて江戸城を主語にして平時の江戸をとらえることで、「政事」と社会の動態的把握を考察する手がかりとすることを目標としている。

「江の中核に据えられた江戸城では、どのような仕組みで日常的な
 かった」とされるにとどまっている。⁽⁵⁾

二 空間としての江戸と江戸城

図1の図化の視点について説明しておこう。

(1) 図示範囲 図1「江戸城概念図」は、將軍の居所を中心に、堀・門で囲まれた領域までを、A・Cにエリア分けして図解したものである。⁽⁷⁾

江戸時代に「御城」と呼ばれた領域Aを「狭義の江戸城」と呼び、これに対して水路・外堀と門に囲まれた全体Cを「広義の江戸城」ととらえる。明治二年（一八六九）三月の天皇再幸後の明治政府による東京の首都化に際しては、ほぼCエリアの内側に相当する部分を「郭内」と呼び、武家地とその上の建造物を収公した。そして、京阪から移した政府機構が集中され、京都から公家たちが移住してきた。明治三年旧大名東京居住令は、「大名華族」の「郭外」住居を決定づけたのである。⁽⁸⁾

近世には、Cの外側にも、武家地・町人地などが広がっていたが、図1ではその領域は捨象している。なお、表1「江戸城と江戸」は、図1の外側の「御府内」までを含んだ空間について、各空間の特質、宗教施設、門、現在の状況を整理したものである。

(2) 図形 江戸城―江戸は、武蔵野台地と隅田川に挿まれた沖積平野という複雑な地形の上に展開した。その狭さから海へと進出し続けた歴史をもち、何段階にもわたって行われた建設・造成と建物移転で、複雑な構造をもっている。そのことが、その構造をとらえにくいものとしてきたと思われる。図1では、各エリアをあえて単純化した図形として図示し、各エリアの機能の特質と相互関係を明示的に表現することを目指した。

(3) 分節化 吉田伸之氏をはじめとする都市史研究においては、社会集団に着目し、空間上に刻印された構造物・境界標識による分節構造と、不可視ではあるが社会を構成する分節構造との両方、さらに対抗的構造

江戸城	呼称	区分	特質	門	現在
江戸城(狭義)	城内	A	将軍居所 役所 儀礼	あり	皇居のうち 宮殿(西丸)、 皇居東御園 (本丸)
		A'	役所(役宅)		皇居前広場
	内曲輪	B	支配(町奉行所・ 評定所) 大名上屋敷		
		外曲輪	C		市(A・Bを支 える町方) 防衛(西部に旗 本・御家人) 全国流通(モ ノ<蔵屋敷-水 路・陸路>、情 報)
D	浅草米蔵(幕 府領年貢)・本 所材木蔵 御三家			なし	
江戸城(広義)	江戸	ご府内			

表1 江戸城と江戸

を含み込んだ議論を展開し、都市の歴史を立体的・動態的に描くことに成功した。一方、図1は、あえて、空間を物理的に分節化する水路・門といった境界装置に着目して図化した。二4で述べるように、権力による空間統御―空間を分節化し、人やモノの動きを規定すること―、それは政治の重要な側面と言えるからである。

(4) 図示方向 図の向きは、北が上ではない。江戸城大手門を正面にすえている。結果として、刊行江戸図の嚆矢とされる「武州豊島郡江戸庄図」などの多くの江戸図と同様の向きでの図示となった。⁹⁾

各エリアの特質を機能別に概述するならば、AⅡ将軍の宮殿と役所中樞のエリア、BⅡ支配にかかわる機関や大名公邸(上屋敷)のエリア、CⅡA・Bを支える市であり全国流通や民間の情報発信に関わるエリア

に分けられる。建造物を中心に述べるならば、Aには、本丸をはじめとする殿舎群・園地、廟、金蔵などが置かれていた。¹⁰⁾ Aには、老中公邸(役宅)をはじめとする邸宅が建ち並んでいた。Bエリアには、町政を支配する東西町奉行や支配違の裁判などを行う評定所、大名の上屋敷などが置かれた。Cエリアには、西部には幕府直臣団が、東部には町人地が存在していた。町人地は図に示したように、日本橋を中心に街道沿いに広がっていた。

江戸城における「政事」とは、これらのエリアの有機的に結びつきのなかで実現していた。¹¹⁾

1 将軍によって意味づけられた空間―Aエリア

Aエリアの中心である本丸空間は将軍という存在によって意味づけられていた。深井雅海『江戸城―本丸御殿と幕府政治』¹²⁾は、江戸城本丸を舞台とした幕府政治と、本丸という空間―将軍の執務・生活空間としての「奥」と「将軍との関係を表徴する」儀礼の場としての「表」―を有機的に論じること成功している。深井によれば、外泊先でも、「奥―表」の基本構造が厳密に維持された。一方、最後の将軍徳川慶喜は、将軍宣下を受けた後も一定期間は「奥―表」など従来の政治空間構成をもつた二条城に、あえて入らず、旧套に縛られない機動的な政治活動を目指した可能性¹³⁾があることが指摘されている。

「奥―表」の空間構造とは、従来言われてきたように、「ケーハレ」構造¹⁴⁾の近世的形態であるとの理解でよいのか。本丸空間と将軍という政治権力・幕府政治の特質は今後さらに検討される必要がある。松尾美恵子「家光政権期江戸城と江戸の防衛」(本号所収)は、江戸城と江戸の防衛の再考の必要性という問題意識に基づくものである。

2 役所空間―A・A'・Bエリア

近年、幕府政治の実態について、文書作成・管理からの検討が格段に進んだ。政治を書類作成・使用・保管・流布の観点からとらえ直すことは、政治を抽象的概念からみるのではなく、また個別の人間関係にのみ依拠してみるのではない、具体的人・組織と場のなかでみる発想ともつながってくる。

江戸幕府の政策は、將軍―老中―奉行といった職制で決定された。⁽¹⁵⁾ 中核となった老中には、Aエリアに協議の場(御用部屋)をもち、またAエリアに役宅を拝領した。また、大名が任命される寺社奉行では、任命された大名が自邸を改造して役所とし、また自らの家中を奉行のスタッフとした。寺社奉行は複数任命されたが、それぞれが個別に自前の役所とスタッフを抱えていたのである。一方、幕臣(上級旗本)が任命される勘定奉行の場合は、常設の勘定所がAエリアに存在し、下僚も幕臣(旗本・御家人)により構成されていた。同じく、町奉行は奉行の居所を兼ねた町奉行所がBエリアに存在した。このように幕府の役所機能は、A・A'・Bエリアに存在していた。Bエリアには、また右の三奉行らが協議する評定所が置かれていた。

3 不特定多数向けの情報の発信地―C・Dエリア

Cエリア東部には、前述したように町人地が拡がっていた。その中心日本橋は、慶長九年(一六〇四)全国里程の基点と定められ、東海・東山・北陸の街道に一里塚が築かれたとされる。⁽¹⁶⁾

市中は不特定多数向けの民間の情報発信の場でもあった。出版・販売を行う本屋は、Cの日本橋付近や、Dの上野・芝・浅草の門前町などに多かった。貸本屋が市中全体に散在していた。⁽¹⁷⁾ また、出版物と演劇・読売・口舌芸など身体的パフォーマンスとが結びついた「近世的公開メ

ディア」⁽¹⁸⁾ が、店先・芝居小屋・路上・広場・開帳や祭の場で、日常の

「外」の情報を人々に発信していた。このような情報のつぼのなかで、江戸自身を表現対象とした地誌や地図も盛んに刊行された。千葉正樹「画像のなかの江戸城」(本号所収)はこうした民間出版のなかで、各エリアとくにAエリアがどのように対象化され表現されたのかを検討する。

4 空間・行動を統御する装置―門

前述したように表1では、門が設置された範囲を「広義の江戸城」と理解している。門は、空間を複数のエリアに分断し、同時に複数エリアを繋ぐ機能をもっている。たとえば、古代中国では、①宮城の門による区画と儀礼との整然とした対応関係や、②都市の門の開閉による住民生活の統制が指摘されている。⁽¹⁹⁾

しかし、江戸城の門については、泰平の時代に機能が形骸化したと見られていたこともあり、門番勤務が実際には請負業者によって担われていた等の実態が明らかにされつつある一方、その政治的機能については本格的に研究されることは必ずしも多くはなかった。そのなかで、針谷武志は、初期の「際限なき軍役」が中期には固定化され、いわば「際限ある軍役」に移行したあと、海防の時代を迎えることに注目し、軍都として江戸を見直す観点から城門警備の問題を詳細に検討した。⁽²⁰⁾ このような研究状況の中で岩淵令治は、機能形骸化論に陥らず、近年明らかにされつつある門番の実態、都市のなかでの機能、儀礼の演出といった諸側面を総合的に検討することを目指している。「境界としての江戸城大手三門」(本号所収)はその問題意識から、都市社会と「狭義の江戸城」との境界装置である大手三門の番の実態を明らかにする。

三 「兵営国家」—比較史の可能性

丸山真男の「兵営国家」という用語を近世日本に適用したのは、高木昭作であった。幕藩体制においては政治の基本体制が軍事組織の発想によって構成されていた。これは、科挙官僚による中国の政治体制とは異質のものであったといえる。一方で、杉山清彦「清代の北京と紫禁城」(本号所収)は、中国清代においても、科挙官僚の統治は旧明領に限定され、帝国全体の運営は八旗組織という軍事組織が担っていたことを指摘している。杉山は、支配集団が軍事組織である形態を「中央ユーラシア的特徴」ととらえている。今後、ヨーロッパとの比較ばかりでなく、「スルタンの奴隸」と呼ばれる軍人政治家を持っていたオスマン帝国など多様な政治・社会のありようとの比較が望まれる。

〔註〕

- (1) 中公新書、二〇〇八
- (2) 小宮木代良「江戸幕府の日記と儀礼史料」(吉川弘文館、二〇〇六)他。
- (3) 小島道裕「戦国城下町から織豊期城下町へ」(都市史研究会『年報都市史研究』1 城下町の風景 山川出版社、一九九三)他。
- (4) 吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市』(全四巻、東京大学出版会、二〇一〇)の吉田伸之・伊藤毅執筆の各巻「序」に研究史がまとめられている。
- (5) 伊藤毅「移行期の都市イデア」(吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市』1 イデア)東京大学出版会、二〇一〇
- (6) 前掲(5)
- (7) 作成にあつては、以下の文献・図を参照した。平井聖監修・伊東龍一「城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ」(至文堂、一九九二・一九九六)、霞会館編『鹿鳴館秘蔵写真帖』(平凡社、一九九七)、針谷武志「軍都としての江戸とその終焉—参勤交代制と江戸勤番」(『関東近世史研究』四二、一九九八)、正井泰夫『江戸・東京の地図と景観』(古今書院、

二〇〇〇)、江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』(柏書房株式会社、二〇〇一)、松尾美恵子「江戸城門の内と外」(『江戸東京博物館研究報告』一二号、二〇〇六)

(8) 松山恵「首都・東京の祖型」(『建築史学』四五号、二〇〇五)など

(9) 引用されることの多い村井益男『江戸城』(中公新書、一九六四)付図「二八〇〇年頃の江戸城とその付近」も同様の向きをとっている。同図も地形を単純化した、一種のモデル図である。

(10) 平井聖・伊東龍一「城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅰ」(至文堂、一九九二)

(11) この点については別稿を予定している。

(12) 中公新書、二〇〇八

(13) 久住真也『幕末の将軍』(講談社、二〇〇九)

(14) 内藤昌『江戸と江戸城』(鹿島研究所出版会、一九六六)

(15) 藤田覚「幕府行政論」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』6『東京大学出版会、二〇〇五])

(16) 「当代記」『当代記・駿府記』(続群書類従完成会、一九八八、「当代記」は、伊勢亀山城主松平忠明の記録と言われる)、「慶長見聞集」(『江戸叢書』二、江戸叢書刊行会、一九六四)

(17) 今田洋三『江戸の本屋さん』(日本放送協会、一九七七)、東京都江戸東京博物館学芸課展示係編集『図表でみる江戸・東京の世界』(江戸東京博物館、一九九八)

(18) 杉本史子「異国・異域情報と日常生活」(『荒井泰典・石井正敏・村井章介編』日本の対外関係6 近世的社会の成熟 吉川弘文館、二〇一〇)

(19) 田中淡「中国の門」(『日本大百科全書』、小学館、一九九三)

(20) 針谷武志「軍都としての江戸とその終焉—参勤交代制と江戸勤番」(『関東近世史研究』四二、一九九八)

(21) 岩淵令治「江戸城警備と都市」(『日本史研究』五八三、二〇一一)